

---

# 陽菜の一日

KI RARA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽菜の一日

### 【Nコード】

N0945Z

### 【作者名】

K I R A R A

### 【あらすじ】

26歳OL一人暮らし。

「恋愛はもういい」と言いながらも、恋愛と無縁では生きられない陽菜のこれからは、一体どこへ向かうのか。  
ストーリーのないまま進む物語。

12月2日 金曜日

定時で仕事を終わり、一人の家に帰った陽菜<sup>ひな</sup>は、荷物を置き、床の上に敷きっぱなしになっていた来客用の布団の上に倒れこんだ。  
寝不足で、仕事中也たびたび危なかった。

（今日これから飲み会かぁ。めんどくさいな）

金曜日の夜。

以前同じ人に誘われて行った飲み会も当たりだった。今回も期待していいはずだ。

彼氏のいないOLとしては、気合いを入れて行くべき合コン。

しかし今の陽菜は、乗り気にはなれなかった。

（それよりも）

こうして布団に顔をうずめていると、今朝ここにいた男の手の感触を思い出してしまふ。

その手がどんな風に腰に触れ、肌の上をさ迷ったか。頬をくつつけ合い、両腕にすっぽりと包まれて、自分よりも少し高い体温をどう感じていたか。

匂いが残っていないかと、鼻をひくつかせるが、彼の男性らしい匂いはかけらも残っていなかった。今朝は匂いが残りませんように思っていたのに、今はそれを残念に思ってしまう。

（いけないいけない。切ろうって決めたのに）

正確には、今すぐ切れるわけではない。

陽菜は首を反対方向に向けて、置いてある男物のジーンズを見た。

（少なくとも、あれを返さなきゃいけないし）

2週間前に置いて行った服が部屋の隅で存在感を放っている。

男と陽菜の付き合いは、意外と長い。

出会いは一年半前。女友達が「あ、男の子呼んだから」と当日になつて呼び出した二人のうちの一人が、その男だった。その日のうちに身体の関係になり、その時は一カ月程度で関係が終わった。そ

れ以来ずっと疎遠だったのが、ここ半年で再び連絡を取り始めたのだ。

恋愛をする気がすっかり失せていた頃だったので、

（メールくらいなら）

と軽い気持ちで連絡を取っていたが、1カ月前、再びこういう関係に戻ってしまったのだった。それまでの半年間は毎日のようにしていたメールも、がくと頻度が減った。

（メールだけにしておけばよかった）

過信していたのだ。一年間ずっと男に惑わされることがなかったのも、以前のように彼に翻弄されることはないだろうと。ところがどうだろう。男がいなくて平気だった期間は、ただ単に恋愛を忘れていただけだった。思い出してしまえば、それなしではいられない。はあ、とため息をついて、陽菜は布団から身体を引き離れた。

気が強くそうに見える少し濃いめのアイラインと、ジャラジャラしたピアス、それにヒョウ柄のポイントの入ったセーターにジーンズで、さっそうとヒールの音を響かせながら、マンションの廊下を歩いた。

今年に入ってから、出会いがどうこうよりも、ナルシズムに浸るために出歩いているようなものだ。

今まで出来なかったファッションで出かけるのが楽しくて仕方がない。そしてそれを褒められるのも快感になっている。

結果、合コンは楽しかった。

職種は堅実で、しかし適度に遊んでいそうな男たちだった。男に関心を寄せられて、自分も相手に関心を持って、話は楽しかった。

去年1年間の恋愛のもろもろで、相手の行動や言葉の端々から真意を読み取ろうという無駄な努力をしなくなった。異性の気持ちなど、永遠に分からないものなんだと割り切ると、心が自由になり、話すのが楽しくなった。楽しくなると、相手も楽しんでくれる。

（アイロニーだわ）

同じように、好きじゃない相手に好かれて、好きな相手に好かれていないということはよくある。諦めた途端に向こうから連絡があることも。

今朝マンションで別れてからメールを寄越さない男はどうだろうか。気が付くと携帯を気にしている自分がいる。

（帰りに彼の家に寄ってっちゃおうか）

しかし、こちらからメールをするのは癪だ。あんまり追いかけて相手を慢心させてもいけない。メールが来なくて焦ってくれればいいと思う。

誘惑に耐え、陽菜は大人しく家に帰ったのだった。

この我慢も、アイロニーなのだろうか。

12月2日 金曜日(後書き)

読んでくださってありがとうございます。一日一更新を目指しています。<http://kirara-shosetsu.seesaa.net/>でも同時掲載していますので、よろしくお願いします。

12月3日 土曜日

風邪を引いてしまつて…すみませんが、今日は行けそうにありません。

陽菜は布団に横になりながら、携帯電話のメール送信ボタンを押した。昨夜は飲み会から帰ってきてすぐに、敷きっぱなしの来客用の布団で寝てしまった。昨日の朝から落としていないメイクでまぶたが重い。肌は乾燥し、頬の辺りがアトピー肌のように乾燥している。

（今日は一日、家から出たくないな）

そんな気分のまま、ランチデートの約束をキャンセルした。すぐに相手から「いいよ」という返信が来た。

（いい人なんだよね）

相手は、最近知り合つた2歳年上の男の人。今回会っていれば3回目のデートになるはずだった。日本人ならば誰でも知っている有名大学を卒業し、堅実かつ高収入の仕事に就いている。

良くも悪くも、遊んでいなさそうな人。

それが、その彼の印象だった。

陽菜の方は、彼よりはかなり下の大学になるものの、彼女が住んでいる地域では一番の大学を出ている。地元の高コンで出身大学を言つと決まつて「すげえ！頭いい」と言う男たちの、ちよつと引いた態度にうんざりしていただけに、地元で自分よりも高学歴な人間と出会う機会を無駄にしたくないと思う。

（なのに何でだろ）

なぜ、自分はワンルームのマンションで一人ネットマンガや小説を読んでいる方を選んでしまうんだろう。

そもそも陽菜は「平成23年は恋愛をしない年」と決めていて、

実際、恋愛する気もなかったはずだ。

友達が結婚を意識し始め、さみしさはある。しかし、自分は自分と習いごとを始めたリ「もっと楽しいことはないか」と今まで興味はあってもしなかったことに挑戦したりした。新しい自分にどんな気づいて、とても充実していた。

誰がどう思つかを気にしていなかったからこそ出来たことだ。恋愛をしていたら、きっと「失敗してもいい」と思い切ることは出来なかっただろう。

それが変わってしまったのは、やはり1カ月前。ジーンズの男と再び素肌を合わせてから。思い出してしまったのだ。人に触れる心地よさを。

「また会いたい」という気持ちは「いつ終わるんだろう」という不安に、簡単に取って代わる。相手に自分の心をすべて与えてしまいたい、という陽菜の本心と、不安から来るブレーキがバランスを取った結果が、今回のランチデートだ。

気のない相手に自分の気持ちをぶつけてしまったら、きっと終わってしまう。どこかで気を紛らわせなければ。

大切にしてくれない男と一緒にいるために、他に大切にしてくれる男を必要とするなんて。

（本当は、こんなことしてても仕方ないって、分かってるんだけどなあ）

考えれば考えるほど、陽菜の気持ちは沈んでいく。

陽菜の土曜日は、こうして過ぎて行った。

12月4日 日曜日

（あれ、メールくれたんだ）

朝起きて、携帯電話を見た陽菜は、意外な思いでそのメールを開いた。金曜日の合コン相手からだ。「金曜日はありがとう。また飲みに行こう」という特に続きのない内容だった。

（やっぱり、義理のメールってことね）

楽しく飲んだものの、特に自分を気に掛けている人はいなかったな、という直感の通りだ。陽菜はお決まりの「ありがとうメール」を返信して、再び布団に沈んだ。

陽菜が再び布団から離れたのは、昼を過ぎてからだだった。

本当は予定があつたのだが、昨日に引き続き、キャンセルしてしまった。

昨日は一日家の中にいた。今日は一度くらいは外に出たいと思っていたが、いかんせんお金がない。財布には千二百円。貯金はそれよりも少ない。車は持っていないので、外に出ようとすれば公共交通機関を使うことになる。手持ちの金から交通費を引いてしまったら、一体何が出来るだろう。

外食も買い物もお金がかかる。もちろん外に出るだけなら、お金がなくても出来る。しかし、もし歩き疲れてしまったらカフェに入りたくなるだろうし、ウィンドウショッピングをすればその商品を買いたくなる。お金があれば、不測の事態が起こっても——例えば、怪我をしてタクシーが必要になったり、偶然友達に会って近くでお茶しようということになったりしても——解決出来る。

お金がないということはなんとも心許ない。

考えれば考えるほど外に出る気がなくなってしまう。

することがないので、仕方なく部屋の隅に散乱している請求書の明細書類を整理することにした。手に取って見れば、9月のものである。

（いやあ、なんて言うか、思い切ったお金の使い方してるなあ）

乾いた笑みを浮かべながら、数字を目で追っていく、平成23年は心機一転、今まで中途半端にしていたことすべてに一度きりをつけて、今までしたことのないことをしようと、自分磨きに専念した一年だった。脱毛、美容院、エステ、さらに自己啓発に目覚めたおかげで、習い事や資格の勉強を始めた。

そのすべてに費用がかかっている。生きて、充実した生活を送るために、お金は必要不可欠だ。お金のあるなしは、ただ単に物が買える買えないという物理的な面だけでなく、心に余裕のあるなしという精神的な面にまで影響を与える。心に余裕があれば、他人に対してオープンになり、優しくなれる。

お金がない状態は、まるで極寒の地に丸裸でいるようなものだ。他人同士が作り出す社会の中で何の装備もなしに無防備でいれば、正常な判断が出来なくなってしまう可能性さえある。

裏がありそうな上手い話に思わず飛びついてしまったり、逆に必要以上に他人を警戒してしまったり、大きく構えているときには決してしないような行動をしてしまうことがある。

陽菜がこうして人に会うのが嫌になり、外に出る気がなくなるのも、お金が影響しているのかもしれない。

（来年は節約と貯金を趣味にしようかな）

心の、ひいては身体の健康のために、お金を貯めると決心した。

陽菜の日曜日は、こうして過ぎて行った。

——と、一日が終わりかけた頃、一通のメールが入った。

今朝メールした金曜日の合コンの相手から、ランチの誘いだ。

12月5日 月曜日

月曜日の朝、陽菜は目が覚めた途端、ストンと胸に落ちてきた思いがあった。

（ああ、彼は、時々泊りに来る“男友達”なんだ）

今日は、最後に会ってから4日目。昨日までは、相手が自分のことをどう思っているのだろうかと思つて散々考えたというのに、何だかそれで納得してしまった。

自分を大切にしてくれない男に期待しても仕方がない、早く切らなければ、と悶々としていたのが嘘のようだ。

彼は陽菜と友達で、気易い関係。だから時々泊りに来る。そして泊りに来れば、お互いに彼氏彼女がいない状態なら、お互いが気持ちいいと思うことをしても何も変ではない。

そういう関係を、セフレ、と呼ぶのかもしれない。

（でも、その名前は嫌だな）

たとえ同じことをしていたとしても、その言葉は使いたくない。それだけの関係だとは思いたくない。世間一般の人が、そうした関係にある以上に、自分たちには通じるものがあるはずだ。

そう、だから、あくまで友達。

（ねえ、期待しないから）

自分自身に問いかける。

（期待しないから、側にいてもいいかな）

傷つけられている自覚はある。身体を重ねても好きと言ってくれないし、どこかへ連れて行ってもくれない。考え方も何もかもが違つていて、会っている時は良くて、一人になれば、自分は何なんだろうと考えてしまう。そして、それでも会いたいと思つてしまうのだ。

（だたの友達だと思つていれば、彼と会っても普通にしていられそ

うだわ)

逆に、そうでなければ彼の不誠実さを責めてしまいそうだ。メールが欲しいのに、私に連絡をしたいと思って欲しいのに、なぜ――と。

初めから期待していなければ、傷つくこともない。

期待しないようするには、どうしたらいいのだろうか。

メールの着信履歴の彼の名前は、もうかなり下に行ってしまった。自分と連絡しなくても相手が平気なのだということが、陽菜は悲しかった。

今、陽菜が彼のことを考えているこの時に、彼も同じように陽菜のこと思い出してくれることを願った。

(向こうから来ないなら、こっちから連絡するしかない。でも……) 追えば逃げる。しかし、追わなければ消えてしまう。

(恋愛はパワーゲーム、ね)

『ゲームに勝ったものだけが、その恋をゲームするか、本物にするか、選ぶ権利を与えられる』(byジエイク)

昨夜読んだマンガのセリフは、まさに今の自分に対する教訓のようだ。

合コン相手との食事は、お昼。「予定が合えば」ということを前提とし、それぞれの職場の同僚を伴っての、軽いノリのもだった。結局、一緒にいた時間は正味30分。

新しい話題はないまま「あの飲み会楽しかったね、また飲みに行こうね」という話に始終した。

夕方にメールが来て、夜に返信をして、次のメールで早々に「おやすみ」という文字が打ち込まれていたことから、そのメールに返すことはなかった。

ぽつんと一人の部屋で、何もかもが自分の横を通り過ぎていく  
ような思いにとらわれていた。

12月6日 火曜日

陽菜は携帯電話を手に、たった今送ったばかりのメールを見返していた。たった一言、おはよう、と送った久しぶりのメール。机の上に置いて、化粧を始めた。

ぶぶ、と携帯電話が震えた。

見ると、昨夜「おやすみ」とメールを完結させた、合コン相手からだった。

思わずもう一度携帯電話を置き、鏡とマスカラを手に取った。返信を待っていた相手ではなくてがっかりしたもの、このままメールが返ってこなかったらどうしようという不安が、少し軽くなっていた。自分のことを気にかけてくれる人がいるということに、心がほっこりと暖くなる。

30分後、おはようメールを送った相手からも返信が来た。おはよう、と返してくれた言葉に、今日の彼の仕事のことを一言添えている。

陽菜は、彼とのメールが好きだった。もともとメールは好きではないが、この少ない文字数で何度も送り合うのが楽しくて携帯電話を何度も確認するうちに、自然と彼以外とのメールも増える。彼とメールをしていない時の陽菜は、非常に筆不精なのだ。

こうしてたった一言、何の意味のないメールにすぐに返信してくれるのが嬉しい。そうしたメールがその日何度か続き、夜までメールをした。

終業後、暗い路地を陽菜は家に向かって歩いていた。カツカツとヒールの音が響く。

（好きになった方が、負けか）

今回の恋、あの“男友達”への気持ちは、叶いそうもない。都合のいい相手として思われてもいい。それでも、彼がいることで、もっと色んな人と関わって、もっと色んなことがしたいと思える。

（メールくらいが、一番いい距離なのかもしれない）

陽菜の恋愛経験と言えば、付き合った人数が3人、身体だけで終わった相手は“男友達”も含めて3人。

（付き合った人は、3人ともが向こうからメールしてくれて、電話してくれて）

そのため、自分の方の気持ちが大きいつきにどう頑張ったらいいか分からない。恋愛がパワーゲームなら、一度負けてしまったらそこからどう覆せば逆転出来るのか見当もつかないのだ。

（好きになってくれた3人とも、結局たいして深く関わることもなく、プラトニックなまま終わっちゃったな）

周囲には、恋愛の話題に事欠かないと言われている。しかしその割に、陽菜には恋愛の土台となるものがなかった。そのアンバランスで不安定な価値観を隠したままここまで来てしまったことが、現在の陽菜の弱さに繋がっている。

恋愛が出来ないなら、お見合いでもいい。

それとも、もう一人で生きていく覚悟を決めて、そのための術を身につけることに専念してしまおうか。

（その選択肢も悪くはない）

12月7日 水曜日

陽菜の“男友達”は名を貴宏と言う。白い肌に、黒々した髪と眉。陽菜は、彼の眉から鼻にかけてのラインが好きだ。この間会ったときは、思わず見とれてしまった。そしてもう一つ好きなのは、肩から二の腕にかけて。組み伏せられた時に見上げた肩は男らしくて、胸がきゅんとした。

貴宏の身長は180センチ近くある。隣に並んだときに、陽菜は彼の背の高さを実感する。貴宏の腰の位置が陽菜のお腹の辺りにくるのだ。さらに両腕が陽菜の肩より上にあるため、ぎゅっと抱きしめられると、陽菜はその腕の中にすっぽり収まってしまう。

女とは違う男の身体にどうしようもなく惹かれる。

（これって、雌の本能だよな）

陽菜はカタカタとパソコンのキーボードを叩きながら、貴宏のどこが好きなのかを考えていた。仕事をしながら考えることではないと分かっているけど、彼のことが頭から離れてくれないのだ。

あの、力強さ。彼がその気になれば身動きを封じることもある。その腕の中で、踊らされている感覚。自分が女だと思い知らされる

――、  
屈服の、瞬間。

ぞく、と背中に痺れが走った。

なぜこんなに、彼に惹かれるのか。他の人では駄目なのか。それが分かれば、貴宏でなくても、他の男の人を代わりに出来るかもしれないという思惑とは裏腹に、貴宏のことばかり考えてしまうのだ。

お昼休みの間、子供を持つ親でもある上司が二人で話しているのを、隣の机で何とはなしに聞いていた。

「え、そうなんですか？」

「そうそう、PTAなんて不倫の巣窟だよ」

どこからそんな話になったのかは知らないが、昼ドラばりの不倫劇を、一方が話して聞かせていた。

「PTAで一緒だった二人が不倫して、お互いの夫婦と別れて一緒になった例もあるし、不倫をされた二人が、どうしようかと相談しているうちにくつついた例もあるよ。どちらも、もう引越してしまったけどね」

聞いていないふりをするのが難しいほど、陽菜はその話に興味津々だった。

（すごい世界だわ。そういうえば、私は知らないけど、この職場内でもあるって誰かが言ってたな）

陽菜の中で、結婚したらもう恋愛生活は終わり、という意識があったが、いくつになっても恋はするもののようなのだ。

（そう考えれば、これから10年経っても36歳。十分に恋愛出来る歳だわ。子供だって、少し体力的につらいかもしれないけど、まだ産める）

慎重になりすぎず、とりあえず結婚してみてもいいかもしれないと思った陽菜だった。

12月8日 木曜日

携帯電話がずっしりと重く感じる。定時に終わった仕事から帰って来た陽菜は、携帯電話を手にとって置き、手に取っては置きを繰り返していた。

滞っているメールが3件ある。

一件は、化粧品の販売をしている年上の女性で、30代だというのにまるで同じ20代の半ばのような若々しさのある人からのメールだ。それまで歳を取るのが怖くて仕方なかったのが、彼女の生き生きとした様子に、歳を取って魅力が増すこともあるのだと教えられた。また化粧品のことを教えてください、とメールした返信が来ていたのだ。

もう一件は、この間の土曜日にランチデートをドタキャンしてしまった男性。この間、行けなかったので……と、陽菜から食事に誘ったメールの返信だった。

そして最後の一件は、金曜日に合コンした男性。あれからメールは続き、週末に飲みに行く誘いがあった。その日は予定が入っていたため断り、この日だったら、と伝えた日に決まった。そして、どこで飲むか、というメールが来ていた。

3件とも、メールが来てから丸一日が経っている。

（今は、メールが嫌い）

思わずため息が漏れた。

貴宏とのメールが、続かないのだ。

火曜日の貴宏とのメールは、その日のうちに完結してしまった。最後にメールを送ったのは陽菜だった。以前だったら、話が続かないようなメールにも返信してくれていた貴宏だったのに、メールは終わってしまった。いよいよ、別れが現実味を帯びてきた。

貴宏に送りたいけど送れない、そんな陽菜が逃げた別のメールは、すぐに気が重くなってしまった。陽菜の恋愛はいつもこうだ。最初はメールをしていても、すぐにおっくうになって、返信しなくなってしまう。最初のデートをしてから、次のデートの約束が立たないまま終わってしまうのは、そのためだ。デートの時に次の約束をしていればまだ続くが、メールで誘いがあると、まず決まらない。

陽菜は、自分の恋愛観にまったく自信がない。身体を重ねた相手と陽菜に恋をしていた相手はいなかったし、陽菜に恋していた相手とは身体を重ねていない。貴宏以外にそうした関係になった相手は二人。その二人に共通するのは、一回り以上年上で、背が180センチ以上あり、タバコを吸い、社交的。その二人とは、たった数回会っただけだ。つまり、陽菜に肉体的な快楽を教えたのは、貴宏なのだ。

自分が本当に、きちんとした恋をして幸せになれるのか、そもそも幸せとはどのようなものなのか、陽菜にはまったく分からなかった。なにせ、快楽と恋の違いすら理解できないのだから。

陽菜には一つ、信条がある。女は、月に一度血を流す。古いものを捨て、何度も生まれ変わる生き物なのだ。その度ごとに新しい自分を生きること、人生を味わい尽くすことが出来ると信じている。恋愛でも同じ。貴宏のことを思うことを、次の生理が来るまでは自分に許そう。しかし、次の生理が始まったら気持ちを切り替えて、まっさらな状態でスタートするのだ。

12月9日 金曜日

寒さの厳しさは心までも荒ませていくようだ。頭痛と腹痛をこまかしながら、陽菜は上司の冗談に笑顔を返したが、心の中ではこの飲み会がお開きになって欲しいと願っていた。

今日は職場の飲み会。飲めない、と言う陽菜を気遣うことなく無理に酒をすすめる上司や、何で飲まないんだという目で見る同僚など、すべてが滅びてしまえばいいのに。

（これだから、この職場の男は嫌いなんだよ）

女を何だと思っているのか。自分がルールだと言わんばかりの態度に、心の距離がさらに広がっていく。なぜ女の価値観を認めようとしなのだろう。酒に付き合うのがそんなに偉いのか。

（でも、同期だって上司に付き合うのは嫌だけど仕方ないって言うてたし。これも給料の一部だと思えば）

自分に言い聞かせてみても、苦痛なのに変わりはない。

（仕事がそんなに偉いのかな、だって結局のところ、誰かにお願いされたことをしてあげて、自分をお願いしたことを誰かにしてもらっただけじゃない）

それなのに、仕事とは苦しいものだとか、つらいものだとか、それを言っている本人が苦しくてつらいと思っっているから、他人がそう思わないのは許せないだけじゃないのかと陽菜は思ってしまう。

ただの不幸の連鎖だ。

それとも、自分が社会に適応できていないだけなのだろうか。自分にとって居心地のいい関係が一体どれだけあるのだろうかと思いついてみても、よく遊ぶ友達や恋愛対象の男とも本当にまともな付き合いが出来ているのか不安になる。

職場の飲み会の最中、先週金曜日の合コン相手からメールがあっ

た。毎日メールをし、次に会う日を決めてから、その内容を決めるメールをしていたのだ。

その相手が、「鍋をしよう」と言ったときから、少し嫌な予感はしていたのだ。

鍋〓大人数〓合コン

つまり、彼が陽菜と連絡をとっていたのは、ただ単に次の合コンにつなげるためだったのだ。「なんだ」と肩すかしをくらった気持ちにはなつたが、特にそのメール相手にこだわりはないので、別の相手と出会うのもいいかもしれないと思っていた。

しかし、問題なのはその後だ。鍋となると、誰かの家でやるのが定番だ。一体誰がその場所を提供するのか。

陽菜「どこでやる？」

男「どこでもいいよ」

（自分の家を提供する気もないのに、鍋を提案したのか）

陽菜「じゃあ、あなたの家は？」

男「陽菜ちゃんの家は？」

それを見た途端、きつぱりと断った。

（馬鹿にするんじゃないわよ）

別の女を紹介するだけでなく、家まで提供しろというのだ。そこまでお膳立てしてあげる義理などまったくない。しかも、知り合つて間もない女の上に上がり込むとよく平気で言えたものだ。

もう何もかもにうんざりだ。こんな夜は、何も考えずに、男の腕の中にもぐりこんで癒されたい。しかし陽菜に、その相手はいなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0945z/>

---

陽菜の一日

2011年12月10日11時00分発行